

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22720328

研究課題名（和文） グローバル化とフランス農民のモラル・エコノミーに関する人類学的研究

研究課題名（英文） Moral Economy of French Farmers under Globalization  
: An Anthropological Study

研究代表者

中川 理（NAKAGAWA OSAMU）

立教大学・異文化コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：30402986

研究成果の概要（和文）：本研究は、南フランスのある農作物市場の文化とその変容を、フィールドワークにもとづいて検討した。その結果、市場の農民たちは日々の実践に裏打ちされた独自の価値をもっており、その観点から近年の市場の危機をもたらしたグローバル化を批判していることが理解できる。この事例から、グローバル化の理論は経済的グローバリズムとグローバル市民社会の対立に還元されない道徳的判断の多元性を理論化する必要があることを本研究は明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research project tries to figure out the social and cultural organization of a fruit and vegetable market in southern France, and its transformation in recent years. The results of fieldwork show that the farmers have a set of values that can be characterized as 'individualiste', based on their day-to-day practices on market. And the farmers criticize the globalization which provoked recent market crisis, from their moral criteria. This case study shows that a dichotomous view which oppose 'global civil society' to globalism is not sufficient, and that we need to theorize the plurality of moral judgment toward the globalization.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学

### 1. 研究開始当初の背景

(1) グローバル化理論の民族誌的検証：近年、グローバル化を民族誌的視点から把握しなければならないという要請は強まっている(Appadurai, Hannerz, Tsing など)。なかでも、Michael Burawoy の「グラウンディッ

ド・グローバリゼーション(grounded globalizations)」論は、グローバル化は現実に対応しないイデオロギーであるとする懐疑論者と、グローバル化によってすべてが変わったとする急進論者という両極端の一般化に反対して、グローバル化の理論を民族誌を通して検証する必要性を説いている

(Burawoy, Michael et al. 2000 *Global Ethnography: Forces, Connections, and Imaginations in a Postmodern World*, University of California Press)。グローバルな力、結合、想像力が特定のコンテキストにおいてどのように作用するかを見ることによって、グローバル化の社会理論と民族誌の対話を図ろうとするこの視点は、民族誌が事例の特殊性に閉じこもる傾向があるなかで重要である。

(2) モラル・エコノミー概念の再生：市場の国際的自由化が人々の生にもたらす影響は、グローバルな力の代表的な例であるといえる。この点を民族誌的視点から理解するための重要な概念として、モラル・エコノミーを位置づける。この概念は、自由主義市場の浸透によって生存の危機にさらされたとき、人々がどのような価値や道徳的基準をとおしてこの現象を理解し批判してきたかを把握するために練られてきた。従来のモラル・エコノミー論は伝統的規範を強調してきたが、この議論を伝統主義に限定せずより広くとらえなおす試みが始まっている (Thompson, E. P. 1991 *Customs in Common*, The Merlin Press)。例えば、Marc Edelman は近年の国際的な農民運動を資本のグローバル化に対応してグローバル化したモラル・エコノミーとして分析している (Edelman, Marc 2005 *Bringing the Moral Economy back in ... to the Study of 21st-Century Transnational Peasant Movement*, *American Anthropologist*, 107(3), 331-345)。このように、人々がどのような価値や道徳的基準を通してグローバル化を理解し行動するかを、モラル・エコノミーの概念によって問題化する。

(3) 日常性への注目：しかし、Edelman の議論をはじめとして、グローバル資本主義への対抗運動への近年の注目は、理論化された組織的運動に偏る傾向があった。しかし、フォーマルな組織の言説と実践を理解することは重要であるが、それだけでは十分でない。モラル・エコノミー論の重要な論者である Scott は、冗談やごまかしといった日常実践が抵抗として大きな意味を持つことを明らかにしている (Scott, James C. 1985 *Weapons of the Weak*, Yale University Press)。同様に、国内の人類学における共同性や連帯についての議論 (例えば、松田素二 2009 『日常人類学宣言!』世界思想社) が示しているように、インフォーマルな日常実践のレベルへの注目によって、人々の関係と価値の生成をより深く把握することが求められている。

## 2. 研究の目的

本研究は、農作物市場のグローバルな再編がもたらした危機的状況において、フランスの農民がどのような価値や道徳的基準にもとづいてインフォーマルな実践を行い生活世界を再編しようとしているかを、モラル・エコノミー論の視点 (市場による生活の侵害を、人々がどのような道徳的認識を通して理解し対応するかを分析する視点) から理解することを目的とする。そのために、フランス、プロヴァンス地方の農村と青果市場においてフィールドワークを実施し、農民と市場関係者の日常実践と相互関係を明らかにする。グローバル化の影響の「地についた (grounded)」視点からの理解によって、グローバル化の社会理論を検証し豊饒化することを、本研究は目指している。

## 3. 研究の方法

本研究では、このグローバル化した状況において、農民たちがどのような生活実践を行い、それをどのような価値と道徳的基準を通して理解しているか、結果としてどのような社会性が生成しているかを、フィールドワークによって明らかにする。そのために、以下の3点を研究対象とする。

(1) 農業と市場の歴史的変化とその認識：(1-a)農作物市場のグローバルな再編、(1-b)農業実践の変化、(1-c)農村の社会生活の変容、(1-d)農業に関わる諸民族集団間の関係性の変化、の4点について、資料調査とインタビューを通してその実態を明らかにするとともに、オラル・ヒストリーの聞き取りによって市場関係者や様々な出自の農民がそれぞれこれらの点をどのように理解し価値づけているかを解明する。

(2) 農民が関係者と取り結ぶ諸関係とその道徳的評価：調査地域では、経営の危機にある農民たちによるインフォーマルな実践 (青果市場において一切記録の残らない現金取引を行って表にあらわれない資金を作り、それをういてヤミ労働者を雇用することで課税や社会保障費の支払いを逃れるなど) がしばしば行われ、それを生存の手段として正当化する語りがある。ここから、農民たちが時に非合法的となる日常的諸実践を市場の圧力に対抗するための技法として正当化する、道徳的基準の存在を仮定することができる。本研究では、より一般的に農民たちが日常的諸実践をどのように価値付け正当化しているかを分析し、そこから農民のモラル・エコノミーを明らかにする。とくに、(2-a)農民と仲買業者との関係、(2-b)農民と

季節労働者との関係、(2-c)様々な出自の農民同士の関係、の3点について、農民が何をあるべき姿と考え何を道徳的基準からの逸脱と考えるかを、人々の実践と語りを通して把握する。また、伝統的な共同性が存在しない状況において、農民のあいだの共同性がいかにして構築されるかを理解する。

(3) 農業支援の市民運動の理解：プロヴァンス地方では、生産性至上主義的な農業に反対し、小規模農民による環境に配慮した「農民的農業」を推進しようとする運動が盛んである。「農民的農業維持のためのアソシエーション(AMAP)」は、農民と消費者のグループが年間契約し、農民が年間を通して各種の野菜・果物を契約消費者に供給する仕組みによって、一部の農民を支援している。調査地域に存在する複数のAMAPに参加する農民と消費者の調査によって、そこにあらわれる価値と道徳的基準を明らかにする。その上で、理論化された組織的運動における言説と、上記(2)から導かれる日常実践における言説を比較する。それによって、両言説の差異と連続性を明らかにする。

#### 4. 研究成果

研究期間中のフィールドワークと理論的分析を通して、次の点を明らかにした。

(1) フランス農作物市場における「市場の文化」：伝統的な観点は、孤立した個人がそれぞれの利害を追求する場として市場をとらえてきた。しかし、近年の研究は市場を社会的ネットワーク(制度、慣習)によって制御される場としてとらえなおしている(図書①)。この観点からは、各市場はそれぞれ独自のモラルをそなえた「市場の文化」を持っているとみなせる。本研究は、この観点から南フランスの農作物市場を分析し、その「市場の文化」を明らかにした。そのもっとも顕著な特徴は、「個人主義(individualisme)」であるといえる。すなわち、市場におけるアクター(農民、仲買業者)は、市場で価格を駆け引きする姿に象徴されているように、他人に従属せず独立を保つことを高く価値づけている。市場の諸制度(野外市場における時間の決められた相対取引)は、この独特の「市場の文化」を支えてきたと理解できる(発表①、論文②)。このような民族誌的理解は、市場と社会を対立的にとらえるモラル・エコノミー観に再考を促し、経済人類学の理論に貢献するものである。

(2) 「市場の文化」の変容プロセスの理解：19世紀以来続いてきた南フランス農民の「個人主義」的な「市場の文化」は、大きな変容

の過程にある。この過程は大きくグローバリゼーションによる文化的固有性の破壊という枠組みでとらえられがちである。しかし、本研究は民族誌的なデータに基づきグローバリゼーションの理論を具体的に検証しようとする立場に立ち、「市場の装置」(市場を可能にする物質的諸制度)に注目するアプローチを援用しつつ、変容のプロセスを分析した(図書①、⑥、発表①、②)。その結果、輸送ロジスティクスの変化、通信手段の変化、それらを活用するグローバルな流通企業の出現が市場のあり方を大きく変えていることが明らかになった。農作物市場における日々の対等な取引は減少し、仲買業者と農民の持続的関係にもとづく、市場を経由しない取引が拡大している。この関係は、仲買業者に対して農民が値段交渉できないという点で、非対称的な支配-従属関係である。この事例は、グローバリゼーションの進展が人間関係を破壊するとする理論的前提と異なり、むしろ従来の市場における独立から市場外取引の従属関係へと移行していることを示している点で、グローバリゼーションの理論に再考を促すものである。

(3) 農民のモラル・エコノミーの多元性：農作物市場の変容が引き起こしている地域農民の危機的状況に対して、さまざまな道徳的批判がなされるようになってきている。本研究では、モラル・エコノミー論の観点から、批判の語りと実践をどのように整理できるかを検討した。結果として、道徳的批判は二種類に大別できることが明らかになった。一方は、市場の農民たちが行う、伝統的価値の観点からの批判である。この批判は、政府やグローバル流通企業が自分たちのこれまでの生活を脅かしていることを批判すると同時に、この危機的な状況においては時に法から外れるインフォーマルな実践を行うこともやむをえないと正当化する(論文①、発表③、④、⑥、⑧、図書②)。他方は、市場をはなれて市民団体をつくり、グローバル化に対抗してオルタナティブな農業を作り出していこうとする人々の、グローバル市民社会の語りである(発表⑦、図書④、⑤)。後者は公共圏において聞き取られる政治的言説であるのに対して、前者はさまざまなインフォーマル実践や市場での日常的雑談において表明される(図書③)。このような検討から、経済的グローバリゼーションとそれに対抗するグローバル市民社会という二分法的な構図ではなく、モラル・エコノミーの多様性を考慮に入れなくてはならないと論じた。

以上のように、本研究では南フランスの農作物市場という具体的な事例から、グローバリゼーションの一般理論を再検討した。このよ

うな「地に足のついた」分析は、たんに現実の多様性を示すというのではなく、理論の精緻化のために必要なプロセスである。今後は、同様の民族誌的研究の比較検討によって、本研究が示した方向性が一般化可能かどうかを検討していく必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① Nakagawa, Osamu 2013 The Morality of Illegal Practice : French Farmers' Conceptions of Globalization, The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social (SENRI ETHNOLOGICAL STUDIES 81), 88, 99-111. (査読あり)

② 中川理 2012「農民の市場、数字の駆け引き」、月刊みんぱく 2012年10月号、2-3頁 (査読なし)

[学会発表] (計8件)

① 中川理、「市場の文化と<遅れ>：フランスの青果市場の事例」、日本文化人類学会第46回研究大会、2012年06月24日、広島大学

② Nakagawa, Osamu, "Transformation of Market Culture: A Case of Fruit and Vegetable Market in France", Workshop on Food Security on Anthropological Perspective (I), 28 February 2012, Osaka University.

③ Nakagawa, Osamu, "Conflicting Moralities: French Farmers under Globalization", IUAES/AAS/ASAANZ Conference 2011, 8 July 2011, The University of Western Australia (Australia)

④ 中川理、「グローバリゼーションとパトロネージ：フランスの農民-労働者関係から」、日本文化人類学会第45回研究大会、2011年6月12日、法政大学

⑤ Nakagawa Osamu, "Infrastructure (and superstructure) of organic agriculture in France", International Workshop "Environmental Infrastructures", 28 May 2011, Osaka University.

⑥ Nakagawa, Osamu, "The Morality of Illegal Practice: French Farmers' Conceptions of Globalization", International Workshop, 'The Anthropology of Europe and its Extending Horizons', 29 January 2011, the National Museum of Ethnology, Osaka.

⑦ 中川理、「モラルの問題としてのフードセキュリティ-フランスの農民運動の事例から」、ワークショップ「フードセキュリティと紛争」、2010年12月4日、大阪大学

⑧ Nakagawa, Osamu, "Conflict and Collaboration among French Farmers under Globalization: A Case of the Provence Region, France", Osaka University Forum "Globalization and Conflict: Entanglement between Local and Cosmopolitan Orientations", 30 September 2010, University of Groningen (The Netherlands)

[図書] (計6件)

① 中川理 発行確定 「市場」、『社会の再想像のために：社会学・人類学への招待』、ミネルヴァ書房

② 中川理 発行確定 「社会をとらえなおす想像力：フランス・プロヴァンス地方の農民の事例」、『ヨーロッパ人類学の視座：ソシアルを問い直す』、森明子(編)、世界思想社

③ 中川理 2012 「<遅れ>を書く」、『コンフリクトから問う：その方法論的検討』、富山一郎、田沼幸子(編)、大阪大学出版会、125-141頁

④ 中川理 2012 「意味のコンフリクト：フランス農業近代化の経験から」、『フード・セキュリティと紛争(GLOCOLブックレット7)』、松野明久、中川理(編)、大阪大学グローバルコラボレーションセンター、27-38頁

⑤ 松野明久、中川理(編) 2012 『フード・セキュリティと紛争(GLOCOLブックレット7)』、大阪大学グローバルコラボレーションセンター、全120頁

⑥ 中川理 2011 「どうとでもありえる世界のための記述：プラグマティック社会学と批判について」、『現実批判の人類学』、春日直樹(編)、世界思想社、74-94頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中川 理 ( NAKAGAWA OSAMU )  
立教大学・異文化コミュニケーション学  
部・准教授  
研究者番号：30402986

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし